

デンマーク来歴の4通のモーツァルト書簡を辿る

野口秀夫

1. はじめに

教授：モーツァルト研究はそのほとんどがドイツ語の文献を中心に進められてきた。その他はせいぜい英語、フランス語、イタリア語の文献だ。だが寡婦になったコンスタンツェ^{注1}がニッセン^{注2}と同棲し（1798年以前）、結婚（1809年）した後に移り住んだコペンハーゲン（1810-20年）での活動を考えると、デンマーク語の文献を読んでみる必要もあるのではないかね。

犬輔：デンマーク語って a-z のアルファベットに æ, ø, å の三文字を加えた 29 文字が使われるんでしたね。d の発音が難しくて、“ズ”音がないと聞いているけど、ぼくには未知の言語だなあ。鳥代さんはどうですか。

鳥代：わたし何とか読んでみるわ。教授に頼ってばかりはいられませんから。

教授：それは見上げた心意気だ。よし、ここに 1890 年にオットー・B・ヴルブレフスキ社^{注3}から出版されたリース・クヌーセン編集・監修の『文学と批評：雑誌』第4号^{注4}という定期刊行雑誌がある。6頁目の記事を読んでみたまえ。

鳥代：承知いたしました。「モーツァルトから妻宛ての未刊行 [ママ] 書簡」の章ですね。P・A・ローゼンベルク^{注5}が簡潔に紹介文を寄せています。「これら 3 通の書簡のモーツァルト自筆稿は P・ブラエム氏^{注6}が先代から受け継いだ財産に含まれ、彼は友好的に私にそれらをコピーさせてくれました。よく知られているようにモーツァルトの未亡人はデンマーク人と結婚したので、これらの書簡がデンマークの家族に継承されていることは容易に説明が付きまします。使用されている綴りはモーツァルト自身のもので気紛れです。塗りつぶしや NN の文字追記は第三者によるようで、恐らく妻によるもの [ママ] でしょう。非常に不明瞭な手書き文字が間違っただけで読み取られる可能性は排除できません。私が疑わしいと思った箇所には疑問の括弧を付けておきました。日付の比較をするためにモーツァルトが 1756.1.27 に生まれ、1791.12.5 に亡くなったことを敢えて思い出しておきましょう」と訳せばいいのでしょうか。手紙は 1791.10.7/8 付け (BD 1193)、1790.10.8 付け (BD 1139) そして 1791.7.5 付け第 2 信 (BD 1180) の順で 3 通が載せられています。当時デンマークにあった自筆稿から書き写したという情報が貴重ですね（ここで BD はバウアー／ドイチュ編『書簡全集』の書簡番号です）。

教授：もう一つ関連記事がある。同じ雑誌の 188 頁だ。

鳥代：はい。「自筆稿収集者のフォルダ III。さらに未公開 [ママ] のモーツァルトから妻宛ての書簡」というタイトルで 1791.7.5 付け第 1 信 (BD 1179) を載せています。「見ての通りこの手紙は 6 頁以降に書き写した 3 つめの手紙と同じ日付を持っている。内容から判断するとモーツァルトから妻に宛ててより早く書かれたに違いない」というコメントが付けられているわ。デンマークには収集家が異なるもう一つの自筆稿があったということね。

犬輔：へーっ。同じ日に 2 通の手紙を書いたことがあったんですね。

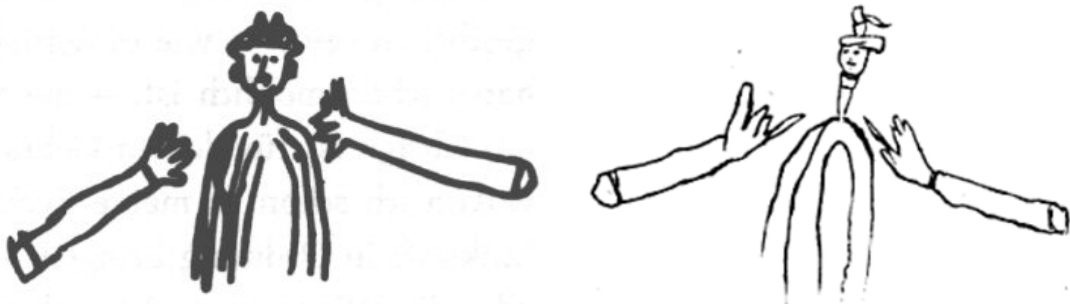
教授：そうだ。モーツァルトが同じ日に同じ宛先に 2 通の手紙を書いたのはこれだけだ。

犬輔：ところで、このデンマークの雑誌への書簡の掲載が世界で最初だというのは本当ですか。

教授：そうでないことは追々分かってくる。

鳥代：現在の解釈によれば、抹消や NN 表記はコンスタンツェによるものではなく、ニッセンによるものとされ、既に解説がなされています。

犬輔：ぼくが一番気になるのは BD 1180 に書かれている素描です。従来見てきたものとずいぶん異なっているんです。『書簡全集』(1962年) (左図)^{注7}では鬼のような角が生えた頭に、ハトが豆鉄砲を喰らったような目をし、チョビ髭の生えた自画像になっていました。一方『文学と批評』の方 (右図) は顔が小さく、首が細長い割に手が大きく指先が尖って描かれています。首を絞められそうなので避けているような姿勢です。それに被っている帽子のリボンが風になびいているさまが不似合いで、おもちゃの顔のようにも見えます。



鳥代：この素描は『アマデー君、遊びましょ！』でも取り上げられていて^{注8}、モーツァルトの自画像ということでした。手前に手紙を読んでいるコンスタンツェがいて、二本の手で今まさにモーツァルトを抱こうとしている絵だということだったわね。

教授：私の考えを再度言うと、モーツァルトは自分を抱いてくれる人を通して自分を見ている。モーツァルトには「相手を理解することは相手の目でものを見ることだ」というモットーが自然に身につけていたのではないか。相手を思い遣って寄り添う愛情を育むための心優しいアプローチであったと思われる。したがってここでも甘えの表出と言うよりは楽しみを共有するという思い遣りの表れではなかと考えられる。そしてモーツァルトのこの性格が同時代の芸術家、古典の作者、古(いにしえ)の無名の識者などに向けられた場合に自身の作品の深みを増すのに多大な効果を発揮したものであろうし、それがモーツァルトの特徴ともなっている。

鳥代：『アマデー君、遊びましょ！』ではこの絵が物理学者・哲学者のエルンスト・マッハ(1838-1916)が描いたイラストレーション「自己観察による私」^{注9}の視点を思い起こさせると注釈されていましたが、詳しい説明を伺いたいです。

教授：モーツァルトはコンスタンツェに成り代わって描いている訳だが、コンスタンツェの視野にコンスタンツェ自身の身体は部分的にしか現われないということを想像し表現している。逆にそうすればモーツァルト自身の身体は全体を表現できるというわけだ。こう考えるにはかなりの自意識が必要だね。マッハは右図の通り寝椅子に横たわりながら右目を閉じ左目で見た自分の眉、鼻と髭に縁どられたアーチ状の視野に、左腕、左手、胴、足とペンを持つ右手を環境の一部として描いた。モーツァルトは相手に成り代わるといふ複眼的操作を通してマッハの哲学思考を先取りしているかのごとくだ。



犬輔：でも『文学と批評』の絵を見ているうちに教授の指摘がどれもしっくり納得できなくなってしまいました。どちらがモーツァルトのオリジナルに近いんだろう。いずれも自筆稿を元としているに違いないはずなだけだ。

教授：それならその素描がどのように伝搬していったのか辿ってみるといい。つまり書簡の出版の歴史を辿ることになる。

2. 初期のモーツァルト書簡集による BD 1180 の紹介

教授：モーツァルトの書簡を最初に活用したのはニッセンの『モーツァルト伝』(1828年)^{注10}とオットー・ヤーンの『W・A・モーツァルト』(1856年、1858年、1859年)^{注11}だが、単独の書簡集としてはルートヴィヒ・ノールの『モーツァルトの手紙』(1865年)^{注12}が最初だ。しかしそれらには BD 1180 が含まれていない。BD 1180 が初めて出版されたのはグスタフ・ノッテボームの『モーツァルティアーナ』(1880年)^{注13}によってだ。

鳥代：ノッテボームはその序文でこう書いています。「18世紀の終わりに向かってフリードリヒ・ロッホリッツ^{注14}がモーツァルトの伝記を書こうとした。それはブライトコプフ・ウント・ヘルテル社(以下 B&H)が発行する筈だった。既にモーツァルトの作品エディションに着手し、モーツァルト未亡人からの手稿譜獲得に携わっていた B&H は、モーツァルトの伝記の収集にも同様の要求を出した。その後、彼らはまた同じ目的でモーツァルトの姉にも接触した。二人とも要求に応じ、豊富な情報を送った。オットー・ヤーンが探し出せなかった多くの部分が、伝記資料の求めに供するべく筆写稿の形で数年前に姿を現した。それはライプツィヒにおいて2冊の冊子として、それぞれほぼ完全に単一のソースからの書簡・エッセイ・詩・新聞記事などからなる、明らかに彼らの要求により女性たちから送り出され収められたものであった。

一つの冊子は144頁にわたって記入された四つ折り版で『モーツァルトの生涯に関する未亡人からの資料』のタイトルを持つ。ほとんどのページの上端に同じタイトルが書かれている。冊子にはモーツァルトの書簡のほとんどが含まれている。これまでのところこれらの25通以上が印刷され、40通以上がまだ印刷されていない。そして従来知られていな

かったモーツァルトの詩のいくつかと多様な来歴を持つ多種資料が目につく。いくつかの記号〔NN など〕は未亡人が必ずしもモーツァルトの自筆ではなく筆写をライプツィヒに送ったことを示している。未亡人自身「保管資料 Actenstücken」と述べている。

もう一つの資料は四つ折り版 73 ページに記述され、『モーツァルトの生涯の資料。モーツァルトの姉によって伝達。99 年 12 月』というタイトルを持ち、各ページの upper 端に「モーツァルトの姉から聴取」と注記されている。この資料の最も重要な部分は姉がフリードリヒ・シュリヒテグロル^{注15}宛てに書き、『故人略伝 1791 年』（第 2 巻、第 2 号、ゴータ 1793 年、82-112 頁）に使われた。この文書は 11 節に分かれ多くの質問に対する回答からなっている。だがそれはマリアヌ・モーツァルトによって書かれた形及び完成度に達した形ではまだ印刷されていない。個々の箇所は、そのままシュリヒテグロルに見いだされるが、少し省略されたように見えるので、シュリヒテグロルは恐らくはるかに多くを持っていたのだろう。彼の省略部分には、その情報源が今や不明のデータや、多かれ少なかれ部分的に修正したデータ、かつ部分的に従来の説を補強するために使われたデータが含まれていたようである。それ以外に冊子のもたらすものは知る限りあまり重要ではない。

犬輔：B&H が伝記執筆材料として入手した書簡に関して「コンスタンツェが必ずしもモーツァルトの自筆稿ではなく筆写稿をライプツィヒに送った」と言えるのは何故なのでしょう。

鳥代：恐らくノッテボームはこう考えたんでしょう。「モーツァルトの自筆稿に書かれた人名の匿名化はコンスタンツェの意向である。だからコンスタンツェが筆写時に NN と書いたのだ。すなわち彼女自身が筆写稿を作成してそれを B&H に渡したのだ」と。でもこの仮定は、モーツァルトの自筆稿においていくつかの人名がニッセンの筆跡によって塗りつぶされ NN と付記されている事実を知れば揺らいでしまう。修正の手が入った自筆稿が B&H に貸し出され、それを B&H が筆写したという蓋然性の方が高いわね。

犬輔：そうですね。B&H に自筆稿を貸し出すに当たってニッセンが都合の悪い人名を塗りつぶして NN と記入したという構図がぼくにも見えてきました。

教授：諸君たちの仮説によればノッテボーム『モーツァルティアーナ』（1880 年）に載っている自画像（右図）は B&H が自筆稿を筆写したものからさらに筆写したものだということになるね。つまり孫引きだ。



犬輔：そうですよ。あっ、ノッテボームの筆写図をよく見ると『書簡全集』の自画像に似ていますね。『書簡全集』が自筆稿を採用せずノッテボームを写したなんて、編集方針に矛盾するようですが。

教授：いい着眼点だ。『書簡全集』注釈（1971 年）には自筆稿の所在地を Kk と表記してあるが、Kk がどこであるのか略語表に載っていない。このことから『書簡全集』の編集者は自筆稿にアクセスできていなかったのではないかと私は疑っている。またその編集者は『文学と批評』に自筆稿が取り上げられていることにも気付かなかった。そのため初版であるノッテボームの肖像画を複写するしかなかった。B&H の『モーツァルトの生涯に関する未亡人からの資料』は失われているからね。したがって曾孫引きとなるのだ。

鳥代：一方、デンマークの『文学と批評』（1890 年）の自画像は、10 年前のノッテボーム『モーツァルティアーナ』で既に出版されていることを知らないローゼンベルクが、図らずも自筆稿から筆写したものだということになるんです。筆写する人が違くと、また筆写回数を重ねると、こんなにも見た目が異なってしまうということなのですね。

犬輔：ということは『文学と批評』が自筆稿を直接複写した唯一の出版かも知れないんだ。

3. その後のモーツァルト書簡集による BD 1180 の紹介

犬輔：その次はルートヴィヒ・シーダーマイヤーの書簡全集（1914 年）ですね。No. 344 の番号が付いています^{注16}。解説巻の「モーツァルトの書簡のファクシミリ稿、筆写稿そして出版稿」の No. 344 部分には「G・ノッテボーム。モーツァルティアーナ」とあり、また「A・コーン、オークションカタログ、ベルリン 1893 年」も挙げられています^{注17}。これはオークションカタログにはファクシミリが載っていたということなのでしょうね？

教授：それをチェックするには No. 344 という番号にアスタリスクが付いて No. *344 となっていることがヒントとなる。

鳥代：「アスタリスクは自筆稿を元にできなかった書簡、あるいは自筆稿を部分的にのみ元でできた書簡の番号の前に付した」と説明があるから、No. *344 が元にしたオークションカタログに自筆稿のファクシミリは掲載されていなかったか、あったとしても部分的だったことが分かるのね。少なくとも肖像画部分のファクシミリはなかったと考えられるわ。それはシーダーマイヤー（右図）が明らかにノッテボームの描き写しだと分かるからなのよ。



犬輔：シーダーマイヤーの図はノッテボームよりもやや首が太くなって、目の間隔が広がっています。頭も鬼の角が2本飛び出ているのでなくドラゴンフルーツの皮のように形が揃っています。筆写を繰り返すごとに奇妙さが緩和され安らかな方向に行くものなんですね。

鳥代：続いてエミリー・アンダーソンの『モーツァルトとその家族の手紙』（1938年）^{注18}を見ましょう。609番を付された書簡には「ノッテボームのモーツァルティアーナ p. 31による」と注記があり、自筆稿によってははいないことが分かります。

犬輔：ところが1985年の改訂版^{注19}にはスタンレー・セイディ^{注20}他の編集者が付けた注釈があり、「自筆稿はコペンハーゲンの王立図書館」^{注21}と書かれていますよ。いつの間にかデンマーク国内の図書館に所蔵されていたんですね。

鳥代：注釈は改訂されたけれど自画像は改訂されていないわ。アンダーソンの1938年版も1985年版も右図のとおりモーツァルティアーナからの筆写のようですから。

犬輔：頭は台座の上の炎のようになっていきますし、口髭が認められなくなっています。手が大きくなっているような気がしますよ。ギリシャの彫像のような衣は肉感的になってきました。なんだかノッテボームの図とシーダーマイヤーの図がミックスされていますね。



教授：次はミュラー・フォン・アゾウによる『ヴォルフガング・アマデーウス・モーツァルトの手紙』（1942年）^{注22}だ。この書簡集にも記載があるという。だが出典は明記がないとのことだ^{注23}。さて、最新のモーツァルト書簡全集がDMEのサイト^{注24}にあることは知っているね。

鳥代：はい。『書簡全集』をベースにどんどん改訂がなされていて、最新は2014年の改訂です。どこが改訂されたのか改訂履歴が何ら書かれていないのが最大の難点ですが、変更点の宝探しをする楽しみがあります（笑）。

犬輔：そこでBD 1180はどう書かれているんだろう。

鳥代：「自筆稿は行方不明」と書かれているわ。そして「テキストの再生はオリジナルの複製による」と書かれているのよ。何故か自画像は割愛されていて、「ここにイラスト」と書かれているだけなの。

犬輔：その「オリジナルの複製」って何のことだろう。

4. モーツァルテウム展覧会に出品されたBD 1180 自筆稿の写真

教授：それに答えてくれるであろう行事が2013年にザルツブルクのモーツァルテウムで開催された。「モーツァルト——図像、モーツァルトのイメージ ～願望と現実のはざまの肖像画～」という展覧会だ。ガブリーレ・ラムザウアーが『素描家モーツァルト』と題して展覧会誌に書いている^{注25}。少し長いが引用しよう。「モーツァルトはバーデンで療養中の妻コンスタンツェ宛てにこう書いた：

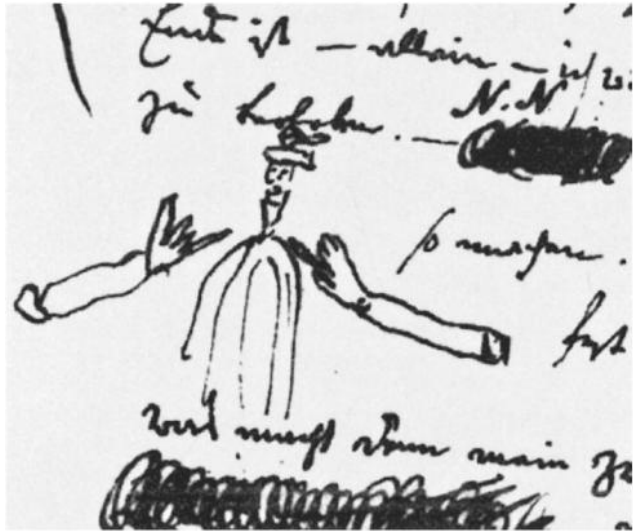
—— 土曜日にはきみを抱きしめられると思うが、ひょっとするともう少し早いかもしれない。用件がすみ次第、すぐにきみのもとへ行く。—— というのは、きみの胸に抱かれて休息しようと思いついたからだ。—— それがやはり必要だよ。—— 心配事や心痛、そしてそれからむ奔走は、やはり人をいささか疲れさせるね。

手紙の本文中にコートを着て奇妙な被り物を付けた男の小さな落書きが組み込まれている。二本の宙吊りの腕が頭に届かんばかりに指を放出している。パウアー／ドイツ編の手紙にリプリントされたスケッチ（右図。再掲）は読者を多くの想い——とりわけモーツァルトの不思議な自画像としての観点から——に誘う。特にモーツァルト記念の2006年には様々な想いが公開され、ひしめいた。その一つ、映像作家クルト・パルムの映像《仔牛のナイフ、あるいはヴォルフガング・モーツァルトの波乱の一生》^{注26}では、拡大された肖像画を用い、映像ドキュメントを通じて最後までモーツァルト自身の言葉を“定番ギャグ”として用い、人々を悲劇的な思考に巻き込むイメージとして解釈した。



—— ぼくには、なにかもが冷たい —— 氷のように冷たいんだ。 —— そう、もしきみがぼくの側にいてくれたら、みんなのぼくに対する愛想よい態度をぼくももっと楽しめるだろうに。 —— でも、いまはそんなにも空虚なんだ。 —— ごきげんよう —— いとしいひと —— いつまでもきみのもの。心からきみを愛する きみのモーツァルト

モーツァルトは1790年9月30日のフランクフルトから妻宛てにこのように書いている。確かにこの絵は見る人に謎めいた印象を残す。しかし、オリジナル手稿を見て再確認するのは、二次資料によるのではなく、できうる限り一次資料に当たるのがいかに大事かということである。走り書きされている男は印刷版とはかなり異なっていて、非常に素人っぽさが出ている（右図）。奇妙な被り物（ナイトキャップ？）が頭を包み；2本の腕先の奇妙な形の尖った指あるいは尖った物体が首のあたりに来ている。本当にモーツァルトはただ疲れているだけであり、コンスタンツェの腕に身を沈めたいだけだったのだろうか？心に分け入り、論理的見地からこの落書きに多くの推測をしたいが、それが許される余地は残されていない。



犬輔：自筆稿では顔が上下に分断されていますが、上目使いで上の空のような表情です。愛嬌があるとも言えますね。服の描写が伝承されてきたどれよりも簡素です。またコンスタンツェの左手は開いていますが、右手は握っていてペンのようなものを持っているようです。これでは抱きしめるには不自然ですね。

鳥代：「コンスタンツェがペンを使ってモーツァルトの肖像画を描き上げたところ」という解釈も成り立つわね。

犬輔：いいえ、ペンではなく人差し指を書きそこなっただけということもあります。

教授：議論はその辺にして、「推測の余地は残されていない」という説に従っておくのが賢明だ。

犬輔：ところで、「一次資料が大事だ」と言っているからには自筆稿が見つかったんですね。

鳥代：確かに注釈には「オリジナル：コペンハーゲン王立図書館」と書かれているわ。

犬輔：そういえば『書簡全集』の注釈（1971年）^{注27}には教授のご指摘のとおり所在地がKkとしか書かれていなかったけど、補巻（2005年）^{注28}には「コペンハーゲン王立図書館」となっていますよ。

犬輔・鳥代：（声を揃えて）やはりBD 1180の自筆稿はコペンハーゲン王立図書館にあるのですね！

教授：実は、私はかつて『書簡全集』のKkの略語が分からず困っていた。1993年のことだ。それがアンダーソンの書簡集でコペンハーゲン王立図書館だと知り、自筆稿の複写を依頼したことがある^{注29}。紆余曲折の末、結局、当該図書館は同日付け1通目のBD 1179だけを所蔵しており、2通目のBD 1180は所蔵していないという回答を得たのだ^{注30}。

鳥代：きっと研究者を含む世間がBD 1179とBD 1180の取り違えを繰り返すうちに両方がコペンハーゲン王立図書館の所蔵だとみなされるようになってしまったんだわ^{注31}。

犬輔：それなら2013年の展覧会でラムザウアー女史の使った写真は一体何なんでしょう。

教授：疑問は当人に確かめるのが鉄則だ。ラムザウアー博士はモーツァルテウム博物館の館長兼モーツァルト・アーカイヴ長であり、メールアドレスも公開されている。

犬輔：分かりました。メールで問い合わせてみましょう。

6. BD 1180 自筆稿の写真の在り処

犬輔：メールの回答が来ました^{注32}。まさに灯台下暗しの諺どおりです。「オリジナルの複製」とはザルツブルクのモーツァルト・アーカイヴ (A-Sm) にある古い写真だったんです。この写真は従来まったく活用されてこなかったけど、やっと日の目を見ることになったというわけです。写真には2頁ある自筆稿が完全に撮影されているそうです。自筆稿の所在に関しては、コペンハーゲン王立図書館ではなく、どこかの「個人が所有」しているのではないかと考えられ、「紛失」ではないだろうと仰っています。

鳥代：2013年には手近の写真を使って印刷したのね。しかも自筆稿の所在を確認することなく注釈には間違った従来説の所在場所を掲載してしまったということだわ。

教授：ここには一次資料としての自筆稿を信奉するあまり、バックアップとしての写真の存在を軽視する資料研究姿勢と、それと矛盾するが写真はオリジナルの忠実な複製であるという実用的研究姿勢の混交が見られる。何れにせよ写真の保管は一次資料並みにすべきなのだ。

鳥代：ところでその写真は公開されているのですか。

犬輔：誰でもアクセスが可能だということです。

鳥代：でも何時、誰が撮ったのでしょうか。

教授：そのためにはデンマーク語のもう一つの文献を読んでもらうことを勧める。拾い読みただけだが「デンマーク音楽雑誌」(1944年)所収のフリッツ・アイベ『コンスタンツェ宛てモーツァルトの書簡』^{注33}にその答えのヒントが隠されていると思われるからだ。

7. 3通のモーツァルトの手紙の来歴

教授：まずはBD 1139、BD 1180、BD 1193の来歴についてどう書いてあるかね。

鳥代：はい。「コンスタンツェ (1762-1842) 或いはニッセン (1762-1826) → ニッセンの若い友人 J・F・ブラエム (1798-1874)^{注34} → その子 P・H・ブラエム (1829-97)^{注35}」とされています。

教授：アイベは続けて「最近亡くなった J・P・ハルトマンは『祖父の作曲家 J・P・E・ハルトマンがある日曜日にブラエムから借用してきた手紙(複数)を彼の子供たちと孫たちに見せてくれた。私は素描が描かれた 1791.7.5 付け諧謔的手紙を生き生きと覚えている』と回想している」と伝えている。

犬輔：P・A・ローゼンベルクも1890年にP・H・ブラエムから借用したんですね。ブラエムは随分気安く貸出したものですね。

鳥代：そうね。そのブラエムは結局ベルリーンのレーオ・リープマンズゾーンのオークション (1892.2.15) に3通とも掛けることになるのよ^{注36}。

教授：その時のエピソードについて「ブラエムの娘シャルロッテ・フェデル夫人 (1943年5月没) によれば手紙が売却された当時、海軍本部大尉——後の海軍副工廠長——であったヘルゲ・フェデルと彼女は結婚した。売上金でピアノを購入したとのことである」と書かれている。

犬輔：まるで「開運! なんでも鑑定団」の出品者の後日談のようだ。皆さん、もっと大事に扱ってほしいものです。

教授：さあ、ここから3通の書簡はデンマークの地を離れ、それぞれが異なった運命の道を辿るのだ。

7.1 1790.10.8 付け手紙 (BD 1139) の来歴

鳥代：BD 1139はシーダーマイヤー (1914年) によればフランクフルトの宝石商ルイス・コッホの音楽自筆稿コレクションの所有となり、『書簡全集』(1971年)でもそのままです^{注37}。

教授：ちなみにDMEによれば2014年現在は「個人蔵」となっている。

鳥代：そして「テキストの再生はオリジナルの複製による」と書かれているのはBD 1180と同様だわ。

犬輔：ということは、きっとそれもモーツァルト・アーカイヴに写真があるんだ。間違いないですよ。

7.2 1791.7.5 付け第2信 (BD 1180) の来歴

犬輔：シーダーマイヤーによればBD 1180はA・コーンのオークションカタログ (ベルリーン、1893年) に記載あると報告されていましたね。リープマンズゾーンのオークションの翌年のことです。ちょっと考えにくいことです。リープマンズゾーンのオークションでこれが売れ残り、そのため相互販売関係にあるA・コーンに回ってきたということでしょうか。

教授：そうかも知れないね。そしてそれ以後行方不明となっている。

鳥代：『書簡全集』の「コンスタンツェから著述家 A・E・ボイエあるいはその息子 P・H・ボイエに贈与された」^{注38} という注釈は間違いなのね。

教授：それは BD1179 のことで BD1180 のことではない。『書簡全集』は取違いを犯しているんだ。

7.3 1791.10.7/8 付け手紙 (BD 1193) の来歴

鳥代：シーダーマイヤー (1914 年) は BD 1193 がケルンの W・ヘイヤーの音楽歴史博物館の所蔵であると述べています。

犬輔：『書簡全集』(1971 年) によればバーゼルのガイギー・ハーゲンバッハ・コレクション蔵に変わっています。

鳥代：DME では 2014 年現在バーゼル大学公共図書館の音楽コレクションになっていますから、コレクションそのものが丸ごと移管されたのでしょうか。

教授：この図書館は電子ファイルの閲覧サービスをしており、インターネット経由で閲覧することが可能だ^{注39}。

8. もう 1 通のモーツァルトの手紙 (BD 1179) の来歴

鳥代：アイベによれば 1791.7.5 付け第 1 信 (BD 1179) は「カレン・マルグレーテ (通称カンマ)・ラーベク (1775–1829)^{注40} → A・E・ボイエ (1784–1851)^{注41} → P・H・ボイエ (1816–89)^{注42} → その娘 J・M・ボイエ嬢から 1940 年にコペンハーゲン王立図書館に寄贈」となっています。

犬輔：「自筆稿収集者のフォルダ III」から写し取ったと『文学と批評』(1890 年) に書かれていたけど、それは P・H・ボイエの自筆稿収集フォルダのことだったんですね。

教授：P・H・ボイエは首相府の一等書記官を務めた人物で、カンマ・ラーベクの書簡集をオットー・B・ヴルブレフスキ社から匿名で出版している。

犬輔：カンマ・ラーベクって何をした人なんですか。

教授：当時の文化人だったんだ。彼女は夫 K・L・ラーベク^{注43} と共に通称“丘の家 (バックセト Bakkehuset)”を開放し、若きロマン派の作家たちにサロンを提供した。ここには H・C・アンデルセンも参加しており、18 世紀から 19 世紀にかけてのデンマーク文学のゴールデンエイジを形成したと言われている。

犬輔：ボイエ父子もサロンのメンバーだったんですね。

教授：そうだ。父の A・E・ボイエも著述家・翻訳家だった。その父に当たるヨハネス・ボイエはデンマークで最初のシェイクスピア翻訳者だ。当時のデンマーク文学界の動向は古典一点張りの詩論を拒否し、自らの創造能力に委ねる「モダンな」詩人になることであり、まさにシェイクスピアに「モダンな」詩的天才を発見し賞賛したのであった^{注44}。

犬輔：モーツァルトの書簡がそのサロンの主宰者の所有に取り込まれたのにはどのような経緯があったんでしょう。

鳥代：アイベはこう推定しているわ。「ラーベクの書房にモーツァルトの書簡があるということは恐らくラーベク自身に起因するものと思われる。だがその理由は音楽的なものではなく、劇場関係者が劇作家モーツァルトへの興味を煽ったからだろう。モーツァルトは当時彼らの心を強烈に占有しており、ニッセン夫妻を通じて貴重な書簡資料というお土産をもたらしたのである」。

犬輔：DME によれば「この書簡の裏にはニッセンの筆跡で

Nature her pencil to his hands commits,
and thus in all her forms to this great master fits.

というサミュエル・ジョンソンの英語の二行詩が書かれている」といいます。

鳥代：『書簡全集』ではこの記入が BD 1180 の裏にあると取り違えた注釈をしていますね^{注45}。

教授：ところで、出典をサミュエル・ジョンソンと断定するには危険が伴う。この二行詩は『ストックデール版シェイクスピア』(1784 年)^{注46}の扉に書かれており、1785 年の巻末広告には「『ストックデール版シェイクスピア』はサミュエル・ジョンソン博士とステイーヴンスのテキストで印刷されている」という明記がある^{注47}。しかしこれは二行詩の出典を同定するものではない。例えば、『イギリスとイタリア』(1785 年) というドイツ語の本にはこの二行詩がシェイクスピアを称える無名のエピグラム (寸鉄詩) として抜き書きされており^{注48}、さらには『イギリスの言語と文学』(1832 年) というドイツ語の本にはジョンソンが既存の二行詩に 6 行を追加した八行詩として掲載されている (下図)^{注49}。

SHAKSPEARE.

Nature her pencil to his hands commits
And then in all her forms to this great master sits.

* * *
When learning's triumph o'er her barbarous foes
First rear'd the stage, immortal Shakspeare rose;
Each scene of many-colour'd life he drew,
Exhausted worlds, and then imagin'd new;
Existence saw him spurn her bounded reign,
And panting Time toil'd after him in vain!

Johnson.

犬輔：DMEでは then が thus、sits が fits になっています。間違いでしょうか。

鳥代：さっきの出典の中で一番古い『ストックデール版シェイクスピア』（1784年）の扉にはどう書いてあったのかしら。

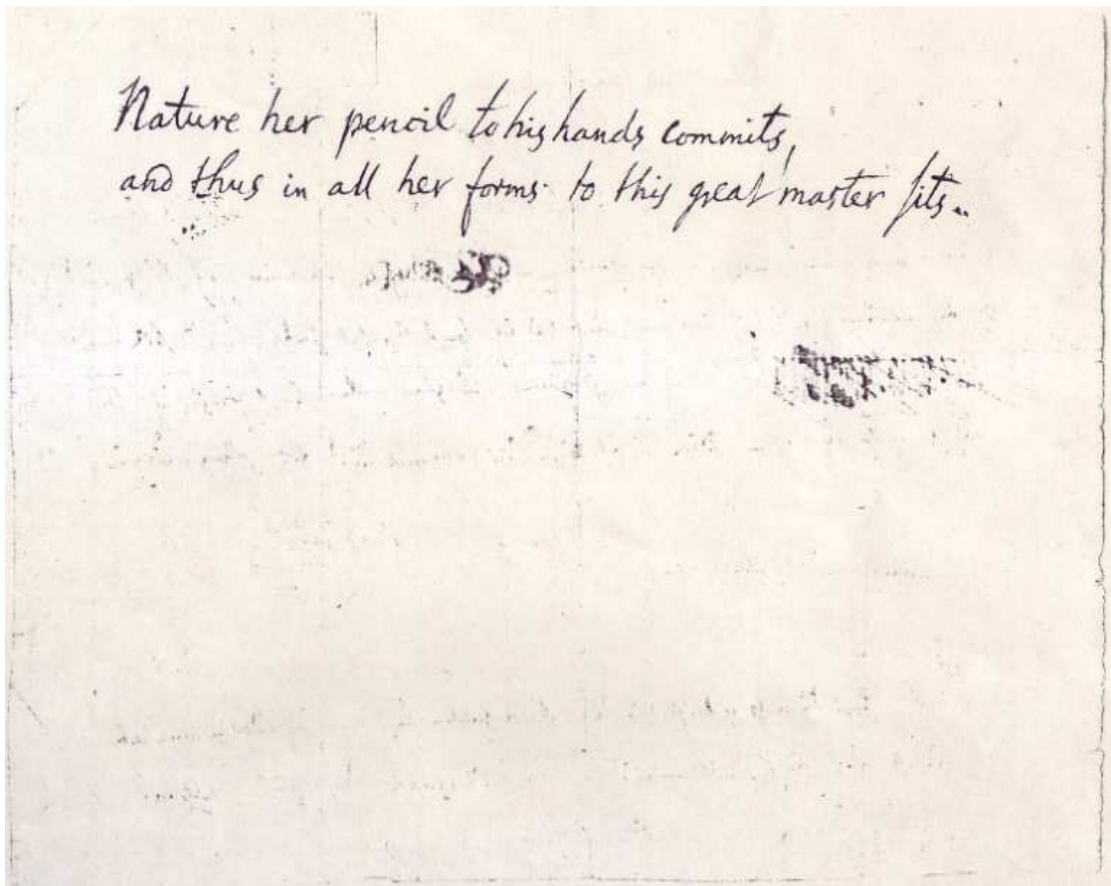
犬輔：コピーを取ってみましょう（下図）。あれっ、どちらでもない then と fits の組み合わせが正しいようですよ。

Nature her Pencil to his hand commits,
And then in all her forms to this great Master fits.

教授：いや、よく見て御覧。fits ではなく sits だ。その前の単語 master の s を見れば分かるね。語頭・語中の s を当時の英語ではフラクトゥールと同様このように書いたんだ。

犬輔：それじゃ、ニッセンが間違えたんですね。

教授：then を thus にしたのはニッセンの記憶違いであろうが、18-19世紀の文化人が s を f に間違えるはずはない。王立図書館から取り寄せたニッセンの手稿を本人の名誉のために載せておこう（下図）^{注50}。…やはり forms の f とは異なる s の筆記体で書かれた sits だね。つまり DME が間違えているんだが、DME 一人でなく『ストックデール版シェイクスピア』の後世の引用者もその多くが f と間違えてしまっているのもまた事実なんだ。



鳥代：訳してみるわ。pencilは古い意味では「ペイントブラシ」、sit to〜は「[画家]に肖像を描かせる」だから、「自然の女神はこの巨匠の手にペイントブラシを託し、彼にあらゆる姿態の肖像画を描かせる」という意味ね (fitsと読む人はどう訳すのでしょうか)。

教授：イギリスの“クラブ向きの男”ジョンソン博士^{注51}の二行詩(八行詩?)とも伝えられる「シェイクスピアを称えるエピグラム」をモーツァルトの手紙裏に添えたニッセンの意図は、コペンハーゲンのサロン主宰者と一緒になって、シェイクスピアとモーツァルトを称えようということだ。因みにクラブとサロンの違いについての議論はまたにしよう^{注52}。

鳥代：カンマ・ラーベクの遺産を引き継いだのち、1830年から1940年まで100年以上もBD 1179がボイエ家に所蔵されていたという事実をアイベは強調しているわ。

犬輔：文化財を大切に作る家系に自筆稿が保管されていたことは本当に運が良かったですね。

9. モーツァルトの手紙の写真撮影

教授：さて、今日の最大のテーマ、誰が手紙の写真を撮ったのかに迫ってみよう。先ほど言ったように私は1993年に王立図書館からBD 1179のコピーを入手したが、そのコピーには「3つのAnnex」が添付されていた。1つ目はP・H・ボイエによるメモでノール版『モーツァルトの手紙』からの引用とモツァルテウムからの手紙の引用など7頁に亘る資料、2つ目はヴルブレフスキーからP・H・ボイエに宛てた手紙、3つ目はヴルブレフスキーの鑑定書(?)のようなものだ。だが、二人とも達筆すぎて私には20年以上経た今でも彼らのフラクトゥールの筆記体(広義のジュッターリーン体)で書かれたドイツ語やデンマーク語を解読できていないでいる(苦笑)。しかし、この2つ目の資料にかろうじてFotografという単語が読み取れることから、写真に関する何らかの手掛かりが得られるはずだ。

犬輔：えっ、教授も読めないものをぼくたちに読めというんではないでしょうね。

鳥代：安心ください。手書きの資料を逐一解読する必要はなさそうですよ。アイベの記事の最後の方にその資料についての要約説明があります。「書簡の由来についての追加情報として、所有者のP・H・ボイエと出版社ヴルブレフスキー間の1881年付け手紙が添付されている。後者(ヴルブレフスキー)はボイエ所蔵のモーツァルト自筆稿を撮影し、4月11日にそのコピーをザルツブルク・モツァルテウムの学芸員ヨハン・エヴァンゲリスト・エンゲルに送っている。エンゲルはモツァルテウムのためにオリジナルを獲得しようとしてやっきになっていたのである」。

教授：よく訳してくれた。これでようやく添付資料の意味が分かったよ。

犬輔：ぼくには写真撮影が1881年という数字・文字に対して線対象・点対象である年^{注53}の出来事であったということにびっくりしています。ところで、教授はヴルブレフスキーと言っていたのに、急にヴルブレフスキーに変更しましたね。何か理由があるのでしょうか。

教授：1881年の資料はそこに書かれている通りオットー・B・ヴルブレフスキーWroblewskiという表記に従ったまでだ。1887年に本人がオットー・B・ヴルブレフスキーWroblewskiに改名したため^{注54}一般には後者で呼ばれる。私の気紛れによる使い分けではない。

鳥代：ところで、アイベは「手紙はオランダの小冊子から破り取られた用紙でありOONENという透かしがある(ヴァン・ゲルダー・ツォーネンのことか?)」と述べています。

犬輔：楽譜の用紙はアラン・タイスンが研究しましたが、書簡の用紙についての研究は珍しいですね。しかも、アイベの論文はずっと早い1944年ですからなおさらです。

教授：さあ、BD 1179の写真を撮影しモツァルテウムに送った(1881年)ヴルブレフスキー(一)が、BD 1193、BD 1139、BD 1180の出版者(1890年)でもあったことを諸君たちは覚えてるね。このことから推測するに、彼は後者3書簡も写真撮影しモツァルテウムに送ったに違いないと私は睨んでいる。

鳥代：4通すべての写真がモーツァルト・アーカイヴに今も保管されているという推定ですね。

犬輔：確かにBD 1139とBD 1180は現状唯一のアクセス可能な自筆稿のコピーとしての写真(ヴルブレフスキーによるかどうかは別にして)がモツァルテウムにありましたからね。

鳥代：でもヴルブレフスキーはBD 1179以外を撮影していなかったかも知れないという疑いもあるわよ。アイベによれば「1941年の没後150年記念に写真が活用された。その写真はモツァルテウムに送ったBD 1179の控えを使ってモーツァルト自筆部分と第三者追記部分を色分けしたものであった」というの。もしBD 1193、BD 1139、BD 1180も既に撮影されていたとすれば没後150年記念には複数の写真が活用されてしかるべきでしょう。

犬輔：「控えを使って」というのは疑問です。4通すべての写真が撮られモツァルテウムに送られ、控えはとられたにしても60年後の1941年にはなくなっていたという可能性が高いのではないのでしょうか(現在も控えはないんですから)。それで当時国内にあった唯一の自筆稿のBD 1179を再び撮影し、没後150年記念に使うことができたんでしょう。

教授：それでは、ヴルブレフスキによって撮影されたデンマーク来歴の4通の手紙の古い写真がモツァルテウムにあるであろうという推定を我々の結論としていいね。私からモツァルテウムにその旨問い合わせせておこう。さらに新しい回答があることが期待される。

注

- 注1：Constanze Nissen (1762–1842) 旧姓 Weber, Mozart の寡婦
 注2：Georg Nikolaus von Nissen (1762–1826) デンマークの外交官
 注3：Otto Bernhard Wroblewski (1827–1907) デンマークの出版者
 注4：Literatur og kritik: et tidsskrift, udgivet og ledet af c. Riis-Knudsen, IV, O. B. Wroblewski., 1890
 注5：Peter Andreas Plum Rosenberg (1858–1935) デンマークの著作家。講演者・講師
 注6：Peder Holger Braëm (1829–97) デンマーク海軍大佐、ダンネプロ・マン勲章受勲の二等司令官
 注7：『書簡全集』IV, p.147
 注8：野口秀夫編著『アマデー君、遊びましょ！』神戸新聞出版センター 2015年 293頁
 注9：Ernst Mach: Die Analyse der Empfindungen und das Verhältnis des Physischen zum Psychischen, G. Fischer, 1886 の第9章「反形而上学的予備的な観察 Antimetaphysische Vorbemerkungen」p.14
 注10：Georg Nikolaus von Nissen: Biographie W.A. Mozart's, Nach Originalbriefen, Sammlungen alles über ihn Geschriebenen, mit vielen neuen Beylagen, Steindrücken, Musikblättern und einem Fac-simile, Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1828
 注11：Otto Jahn: W.A. Mozart. Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1856 (Bde. 1/2), 1858 (Bd. 3), 1859 (Bd. 4).
 注12：Ludwig Nohl: Mozarts Briefe. Nach den Originalen herausgegeben, Salzburg 1865
 注13：Martin Gustav Nottebohm: Mozartiana, Von Mozart herrührende und ihn betreffende, zum großen Theil noch nicht veröffentlichte Schriftstücke, Nach aufgefundenen Handschriften herausgegeben, Leipzig 1880
 注14：Friedrich Rochlitz (1769–1842) ドイツの物語作家・劇作家・作曲家
 注15：Friedrich Schlichtegroll (1765–1822) 教師・学者・伝記作家
 注16：Ludwig Schieder: Die Briefe W. A. Mozarts und seiner Familie, Eine kritische Gesamtausgabe, 5 Bände, München / Leipzig 1914, Band 2, pp.344-345. No. 344
 注17：同上 Band 1, pp.xx-xxi.には A. Cohn, Auktionskatalog, Berlin 1893 とある
 注18：Emily Anderson: The Letters of Mozart and his Family, Macmillan and Co., Limited, 1938
 注19：Emily Anderson: The Letters of Mozart and his Family, 3rd edn, ed. Stanley Sadie and Fiona Smart, London: Macmillan, 1985
 注20：Stanley Sadie (1930–2005) イギリスの音楽学者・批評家・編集者
 注21：Autograph in the Royal Library, Copenhagen
 注22：Erich Hermann Müller von Asow: Briefe Wolfgang Amadeus Mozarts, hrsg. mit Originalbriefen in Lichtdruck im Auftrage des Zentralinstituts für Mozartforschung am Mozarteum in Salzburg, 2 Bde. mit 3 Kassetten, Berlin, Alfred Metzner, 1942
 注23：実際の確認は未。
 注24：Mozart Briefe und Dokumente – Online-Edition
 注25：Gabriele Ramsauer: Mozart, der Zeichner in MOZART·BILDER·BILDER MOZARTS Ein Porträt zwischen Wunsch und Wirklichkeit, 26. Jänner – 14 April. 2013.
 注26：Kurt Palm: Der Wadenmesser oder Das wilde Leben des Wolfgang Mozart
 注27：『書簡全集』IV, p.147
 注28：『書簡全集』VI, p.418
 注29：1993年7月27日、国際郵便による受取り
 注30：2015年10月29日電子メールによる。Erik Petersen 氏に感謝する。
 注31：2通あることに気が付かなければ混乱するのは当然のことである
 注32：DME 書簡編集担当のアニーヤ・モルゲンシュテルン Dr. Anja Morgensterns 氏からのご教示に感謝する
 注33：Frits Eibe: Mozarts breve til Constance, i Dansk Musik Tidsskrift, 1944
 注34：Johan Frederik Braëm (1798-1874) 海軍大佐
 注35：注6参照
 注36：Catalog einer kleinen aber durch Seltenheiten ersten Ranges und besonders schöne Stücke hervorragenden Authographen-Sammlung, welche am Montag den 15. Feber 1892 Vormittags 10 Uhr im Geschäftslocal von Leo Liepmannsohn Antiquariat. Berlin W. 63 Charlottenstr öffentlich versteigert.
 注37：『書簡全集』VI, p.400. Musikautographensammlung Louis Koch.
 注38：『書簡全集』VI, p.418
 注39：Basel, Öffentliche Bibliothek der Universität Basel; Musiksammlung
 注40：Karen Margrethe "Kamma" Rahbek (1775-1829) デンマークの文化名士・サロン女主人・書簡の麗人
 注41：Adolph Engelbert Boye (1784-1851) デンマークの著述家・翻訳家
 注42：Peter Henrik Boye (1816-89) デンマーク首相府の一等書記官・講演家
 注43：Knud Lyne Rahbek (1760–1830) デンマークの文学歴史家、詩人・翻訳家・編集者・演劇評論家
 注44：Sven Hakon Rossel: A History of Danish Literature, University of Nebraska Press, 1992, p.167-168
 注45：『書簡全集』VI, p.418
 注46：Stockdale's Edition of Shakspeare: Including, in One Volume, the Whole of His Dramatic Works with Explanatory Notes Compiled from Various Commentator, John Stockdale, 1784. シェイクスピアの名前の綴りは本人の署名でもさまざまであったが生前の出版物の多くは Shakespeare であった。しかし後に Shakespear となり、18世紀末から19世紀にかけては Shakspeare となった。さらにロマンティック期・ヴィクトリア期には Shakspeare となり、19世紀中期から20世紀初頭にかけて再び多くのヴァリエーションが出たが、1860年代のケンブリッジやグローブのシェイクスピア版の普及によってやっと20世紀には Shakespeare の綴りに落ち着いたのである (Wikipedia)。
 注47：例えば The Coalitional Rencontre Anticipated: A Poetical Dialogue. London, John Stockdale, 1785 の巻末
 注48：Johann Wilhelm von Archenholz: England und Italien, Dykische Buchhandlung, 1785
 注49：H. Nolte, Christian Ludwig Ideler, Handbuch der englischen Sprache und Literatur, Nauckschen, 1832
 注50：注29参照
 注51：Samuel Johnson (1709–84) イングランドの詩人・批評家・文献学者。『シェイクスピア全集』の校訂・注釈など。親しみをもって「ドクター・ジョンソン」と称される。「Clubbable man」(クラブ向きの男)と呼ばれ、クラブでの談論を好んだ
 注52：例えば、小林章夫ほか著『クラブとサロン：なぜ人びとは集うのか』NTT出版 1991年
 注53：前掲 野口『アマデー君、遊びましょ！』235頁
 注54：Dansk Biografisk Leksikon (WEB)

(作成：2015年12月5日、改訂：2017年4月10日)